



優偶措置を最大限に利用して、フロントエリアでの石油・天然ガス開発に乗り出そうとしているカナダの大企業がいくつかある。

例えばハスキー・オイル（本社カルガリー）は、大西洋岸での開発に三千万ドルの費用を組んでいる。場所は、おそらく、一九七九年に発見され、埋蔵量十億バレル以上と推測されているハイバーニア地区の近くである。

ノーセン・エネルギー資源（トロント）でも、いくつかの有望な鉱区について分祈しており、今年中には開発に参加しそうだ。

昨年北緯六十度以北で掘削された油井は全部で十七本。大西洋岸沖では、七本の油井が完成した。

またエッソは、海底掘削のため、ポーツフォート海に同社最大の人工島イッサンナクを完成した。同社は昨年六月、イッサンナク〇一六一鉱区で石油を発見したが、これをさらに実証するため、今冬、油層の輪郭を調べる二本の探掘井を掘る予定。五メートル幅の油層から日産二千四百バレルの産出能力のあることが分った。イッサンナク〇一六一鉱区は、これま

でエッソがポーツフォート海で発見したもののうちで最大の油田である。

エッソはさらに、マッケンジー流域にある同社のノーマン・ウェルズ油田の生産を増加する計画で、政府の諸機関に対し、マッケンジー川に六つの人工島を建設する件およびそれらの人工島から百九十本の油井を掘る件について許可を申請している。これが完成すれば、同地域での産油量は現在の日産三千バレルから二万五千バレルに増えるという。費用九億ドルというこのプロジェクトは、当初一九八一年を完成のめどにしていたが、連邦政府が環境保護の観点から追加の調査を勧告したため、一年以上延期された。計画が承認されれば、来年には着工できるものと同社では見ている。

ハイバーニア油田開発にも加わっているガルフ（カナダ）社は、現在、国内企業を対象とした連邦政府の優遇措置の適用を受けようと政府と交渉を進めている。同社は、石油産業のカナダ化という連邦政府が打ち出した政策によって、買収の好対象になったと広くうわさされているが、辺境地域にかなりの鉱区を保有しており、その開発のために連邦政府の優遇措置を希望しているのかもしれない。

辺境での資源開発に関する最近の大ニュースは、一九七九年のハイバーニア油田の発見とポーツフォート海のコパノア地区におけるドーム・ペトロリアム社の油田発見であった。昨年は、イッサンナク地区とドーム社のターシウト地区での発見が話題となった。ターシウト地区は、

試掘中、日産わずか八百バレルしか産出しなかったものの、比較的浅い海域に位置しているため、今年中には商業化のメドがつくものと思われる。

ドーム・ペトロリアム社は、国家エネルギー政策に呼応して最近ドーム・カナダ社を創立した。この新会社は、連邦政府の優遇措置を最大限に利用して、何本かの油井を今年中に完成させ、油田の有無を確認するものと思われる。ドーム社は、また、今年中にターシウト地区に第一号の人工島を築き、そこから開発油井を掘削するはずである。

ドーム社は、国家エネルギー庁（NEB）に対し、一九八五年までにはポーツフォート海からの石油産出が可能となり、産油量は一九九〇年までに日産七十五万バレル、一九九五年までに最高百五十万バレルに達するだろう、と予測している。同社の計算では、そのためには四百億ドルの投資が必要だという。ドーム社は、今年、辺境での石油開発に三億ドルつき

込む予定である。

一方、大西洋沿岸で昨年騒がれたのは、モービル社がハイバーニア地区で掘削を続けたということだけ。ハイバーニアの東南およそ四十キロにあるモービル社のもう一つの油井は、日産千九百五十バレルという結果がでたが、商業ベースに乗らないことが分かった。同社は、ハイバーニアの近く、およびノバ・スコシアの東南にあるセーブル島の沿岸でも試掘している。

国営のペトロ・カナダは、今年、グラン・バンクス、ノバ・スコシア沿岸およびラブラドル沿岸で探査を行う。同社が昨年掘った油井からは何も出なかったが、一帯には相当の埋蔵量があるものとみて開発を続けるという。またサール島地域には商業化できる量の天然ガスが眠っているものと同社ではいらんでいる。ペトロ・カナダは、北極地域でも活動をさらに推進していく構えである。

（クローブアンド・メール紙、三月十六日号より転載）

移動する

北磁極

登山や航海に磁石（磁針）は欠かせない。地球上のどの地点でも、磁石は

ほぼ南北を指すため、自分の位置を確認できるからである。磁石がこのように南北を指すのは、地球そのものが一つの巨大な磁石だからだと考えられている。この地球という磁石の両極を北磁極、南磁極と呼ぶ（より具体的には、「地球上で地球磁場の磁力の水平成分がゼロとなる地点を磁極という」（平凡社「世界大百科辞典」などと説明されている）。